

### 1 自己評価及び外部評価結果

**【事業所概要(事業所記入)】**

事業所番号	3373401011		
法人名	医療法人社団井口会		
事業所名	グループホーム青空		
所在地	岡山県真庭市西河内42-2		
自己評価作成日	令和5年8月1日	評価結果市町村受理日	

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	
----------	--

**【評価機関概要(評価機関記入)】**

評価機関名	特定非営利法人 津高生活支援センター		
所在地	岡山市北区松尾209-1		
訪問調査日	令和 5年 10月 17日		

**【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】**

<ul style="list-style-type: none"> <li>・個人の尊厳を大切に、その人らしく、明るく穏やかな暮らしが提供できるよう支援します。</li> <li>・同一法人内に総合病院、精神専門病院があり、医療面では24時間対応できるシステムの連携ができていたため健やかな生活が支援できます。</li> <li>・地域との繋がりを密に持ち、住み慣れた地域でその人らしく生活が出来るよう家族や地域の絆を大切に支援します。</li> </ul>
--

**【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】**

<p>自施設調理の食事や毎日の入浴、外出機会の多い暮らしなど、家庭的で質の高いケアを提供している様子が窺えます。その人を知る事がケアの本質という考えが職員に浸透しており、日々の支援に反映されている様子が見受けられます。ホームが小学校の通学路の途中になっており、児童が気軽に立ち寄れる雰囲気があります。また、晴れている日には日課の散歩に行き、近隣住民と挨拶を交わしたり、地域と繋がりがながら暮らしている様子が窺えます。運営推進会議では、地域住民が認知症をより身近に感じたり、認知症の知識を深められる事を目指して研修を取り入れたりしています。地域密着型サービスに期待される社会的役割を踏まえて、様々な活動に積極的に取り組んでいる姿が見受けられます。</p>
--

**V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します**

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	スタッフルームや共有スペースに掲示し、常に意識しながら日々の業務に繋げている。事業所の活動の指針となっている。	掲示する理念には、具体的な行動指針も明記しており、誰もが理解しやすい内容となっています。また、個々の生活リズムを大切にされた暮らし方や、地域に目を向けた様々な活動からも、理念を共有し、実践に繋げている様子が窺えます。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	新型コロナウイルスに伴い、地域の行事に参加することが少なくなったが、日々の散歩などで挨拶を交わし顔なじみの関係が築けている。	日課の散歩に出かけると、近隣住民が気軽に声をかけてくれます。小・中学校との合同行事や、地域行事を通じた地域交流が再開できるよう今後の活動を検討しています。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	コロナ前は、地域の方々を招き利用者と交流することで認知症への理解の場となっていた。現在も、地域の小学校通学路(こども110番連絡所)となっており、子供たちが気軽に立ち寄り施設利用ができるようにしている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	R5年4月より3年ぶりに運営推進会議を再開した。住民会長をはじめ地域の方や、入所者家族に出席して頂き会議を行っている。施設の状況説明や情報・意見交換を行いサービス向上に活かしている。	地域住民や家族が多く参加しています。事業所の状況や取り組みを報告し、参加者からの意見をサービス向上に活かしています。認知症への理解を深める啓発活動等、高齢者が暮らしやすい地域づくりの拠点として、更なる活動の発展に期待します。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	市内のグループホーム連絡会に出席をして頂き、情報提供を行ってもらっている。日頃より電話やメールで困難事例などの相談や連絡など気軽に行っている。	主に運営推進会議やグループホーム連絡会の機会を通じて、事業所の実情やケアの取り組みを伝え、関係構築に取り組んでいます。困難事例等の相談は、電話やメール等の手段を用い、その都度行う様にしています。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束はおこなっていない。2か月に1回施設内で研修会や身体拘束について話し合いを行っている。「身体拘束ゼロへの手引き」を職員全員がいつでも読めるようにしている。	定期的な内部研修や話し合いを通じて、理解を深めています。適度な運動によって質の良い睡眠に繋がったり、入居者の生活リズムが整う事も、身体拘束をしないケアに通ずる重要な側面と考え、日々のケアに努めている様子が窺えます。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	外部研修・Web研修に積極的に参加している。スタッフ全員に研修内容を報告することで、一人ひとりが自身のケアを考える機会となり虐待防止の徹底に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	外部研修に参加し、研修報告をおこなっている。成年後見制度等について、テキストの設置を行い学習を行い、必要時活用できるようにしている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	事前に、本人や家族に十分な説明を行い、質問等に対して丁寧な説明を行うことで、不安感の軽減を図っている。不安、問題に対してその都度対応している。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	相談窓口や意見箱を設置している。また、重要事項説明書に苦情の申し立てができることを明記し説明している。運営推進会議や面会・カンファレンス時にご家族の意見を聞き運営に繋げている。	家族は意見や要望、不満を言い出しにくいという事を理解し、家族の面会時には職員から積極的にコミュニケーションを図っています。請求書内の手紙に、気軽に連絡を頂ける様に書き添える等の配慮をしています。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	適宜、全体会議やユニット会議、申し送りや申し送りノートを活用することで、日々の気づきや意見、提案を聞く機会となっており、業務に反映することができている。	全体会議やユニット会議にて、職員の意見や提案を聞く機会を設けています。ケアに関する日々の気付きは申し送りノートを活用し、情報共有とケア方法の統一に努めています。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職員がやりがいをもって働けるよう、適宜個別面接を行っている。話し合いの中から就業規則の整備、見直しを行い、改善に努めている。長所を生かしながら働くことができる職場作りに努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人による新任職員研修会の開催。年間研修計画を作成し、研修会への参加の呼びかけている。働きながら学習ができるようにしている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	真庭市内のグループホーム連絡会に出席して、他施設との交流や情報交換を行い、サービスの質の向上を目指している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	利用者の話を傾聴し、思いをまずは受け入れ、不安に寄り添い安心して過ごしていただけるように努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族の不安や質問等への対応を行っている。その都度丁寧に説明を行い関係づくりに努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人の状況などに応じて、今どのようなサービスが必要かを本人、家族と共に考えている。必要に応じて他のサービスの検討もはかり、連携を図っている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	自分でできることはして頂き、スタッフと共に作業することで支え合う関係を築いている。畑しごとや四季の行事など利用者からスタッフが教わるが多くある。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	コロナ感染症のため、外泊は難しい状態だが、本人や家族の希望に沿った対応ができるよう検討し、家族の絆を大切にしている。「青空だより」を発行し、利用者の様子を家族に知らせている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	馴染みの場所へドライブに行ったり、地域の行事に参加している。馴染みの人への電話連絡や、はがきのやり取りの支援を行い関係が途切れないように努めている。	入居者との会話から外出先を決める事もあります。家族や友人に手紙を出したいと希望があった場合は、宛名書きやポスト投函を職員が手伝ったりして、馴染みの関係が途切れない支援に努めています。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	レクリエーションや外気浴でゆったりとした時間を共有ができるよう環境を整え、利用者同士で会話ができるよう支援している。また、会話が弾むように職員は話題を提供をしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退所後でも、家族からの相談があれば受け入れ体制をとっている。次施設に移られても、面会等行き様子を伺っている。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	本人の思いや要望を聞いたり、日常の中で表現される思いや様子を観察し、その人らしい生活ができるよう支援に努めている。	「小さな困り事は、大きな困り事」と考えており、入居者の何気ない言葉や表情から、本人の思いや意向を汲み取るようにしています。本人が望む暮らしを検討して支援に努めている様子が窺えます。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人、家族にインテーク時情報収集を行っている。入居後も、日常会話からどのように暮らしてきたか、大切にしているものは何かを把握し対応している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	一人ひとりのペースに合わせて、日々の心身状態等を把握し、経過記録や申し送りを通してスタッフ間で情報共有をしている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	随時、カンファレンスを行いその人にあったケアができているか見直しを行っている。家族には、面会時に希望や思いを伺いそれらの情報をもとに介護計画を作成している。	カンファレンスは介護計画の設定期間に限らず、状態の変化や本人家族の要望が変化した時にも、臨機応変に開催しています。カンファレンスには家族の出席率も高く、関係者と共に本人本位で話し合い、意見やアイデアを反映した介護計画を作成している様子が窺えます。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	介護経過記録に日々の状態を記入し、全スタッフで情報共有しながら介護計画に活かしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々にも生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	家族の状況にあわせ、通院の必要な方の送迎、付き添い、入院時必要な支援を行っている。入院中も見舞い状況の把握に努めるなど柔軟な対応に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	ボランティア慰問の受け入れを行っている。日々の中で近隣住民の方々と交流をおこなっている。季節に応じた地域の観光名所や馴染みの場所にドライブにでかけている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	毎月内科医の往診を受けている。必要時には、相談・対応をしてもらえる関係が築けている。必要時には、職員付き添いのもとスムーズな受診支援ができています。	本人と家族が希望するかかりつけ医を選択できません。協力医の落合病院からは、各ユニット毎で月1回往診があり、事業所から事前にファックスで日頃の様子を伝えることで、適切な医療が受けられるように支援しています。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	介護職は毎日バイタル測定を行い健康状態の把握をし、訪問看護師に相談し異常の早期発見に努めている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時は情報提供書など情報交換を行いながら、病院相談員と連携しスムーズな退院の運びとなるよう努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	終末期について、入居時に意思確認を行い本事業所が対応できる最大限のケアについて説明し、本人や家族と話し合いを行っている。法人内で連携をし柔軟な対応を行っている。	基本的に看取りの受け入れはしていませんが、ホームの想いとして、一日でも長く事業所で生活できる事を考えて支援しています。夜間でもかかりつけ医と相談できる体制が、職員や家族にとっても安心に繋がっている様子が窺えます。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急時対応マニュアルにて研修を行うよう努めている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	防災訓練・避難訓練を地元消防団と合同で訓練を行っている。マニュアル作成を行い、法人全体で検討し、訓練を実施している。	火災や土砂災害、河川氾濫等、様々な災害を想定した訓練を実施しています。訓練には地元の消防団も参加し、実際に入居者の避難誘導をしています。災害対策の面で地域と協力体制を築いている様子が窺えました。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	個々の性格や生活歴を知り、一人ひとりの思いを大切に、その人の自尊心を損なわない対応に心がけている。	その人をよく知る事を大切に考えており、個々の性格に合わせたコミュニケーションを心掛けています。また、入居者の反応や意見を職員間で共有し、本人の思いを汲んだ関わりが統一して行える様に努めています。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	生活の中で、自由に思いや希望が言える関係や環境を整え、自己決定ができるよう支援している。意志表示が困難な方は表情を読み取ったり家族から情報収集し対応に努めている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	1日の生活日課は大まかに決まっているが、本人のペースや意思をくみ取り柔軟な対応をすることで、本人の負担とならないような支援に努めている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	身だしなみは普段から声掛けをして整えるよう支援している。本人の希望に寄り添いながら衣類を選んだり、一人ひとりのおしゃれが楽しめるように努めている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	希望の食事や好みの食事等を聞き取り献立作成を行い、楽しみが持てるようにしている。季節の行事食や旬の野菜を使用し、季節の味わいがある食事の工夫に努めている。	入居者との日々の会話から、献立や食材の調理方法を決めています。皮むき等、入居者と一緒に行う場面もあり、食事を楽しめるような工夫が見受けられました。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事摂取量、水分チェックを行い、水分のとれない人には、水分の内容を工夫している。減塩、糖尿病に配慮した食事内容も検討し対応を行っている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後に口腔ケアの声掛けを行っている。できない方には、介助を行い口腔の清潔保持に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	全員にトイレで排泄が出来るよう支援している。本人の排泄パターンを知り対応している。また、トイレに目印をつけ自分でいけるよう環境を整えている。	個々の排泄パターンを把握し、一人ひとりに合わせた対応を行っています。また、チェックシートは、安易に見えない様に表紙を付けており、排泄支援の場面でも、尊厳とプライバシーを大切に配慮が見受けられます。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	食事量、水分摂取量を把握し、毎日の散歩や体操など適度な運動に取り組んでいる。食後トイレに座って頂くよう声掛けを行っている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	毎日の入浴を心掛けている。本人の体力や希望、健康状態に考慮して対応している。個人に合わせた快適な温度で気持ちよく入浴が出来るよう支援している。	入浴は生活の質を高める大切な習慣と考えており、入居者の思いや状態にあわせて基本的に毎日の入浴を心掛けた支援を行っています。入居者の湯温の好みも職員が把握しており、気持ちよく入浴できる為の工夫や配慮が窺えます。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日中の活動量を増やし安眠につなげるよう支援している。居室の環境(照明・室温)を整えている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	一人ひとりの薬の内容をスタッフが確認できるようにしている。服薬は必ずスタッフが管理し、手渡しで内服するまで見守っている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	一人ひとりの状況に応じて、できる作業や趣味活動等、本人が自発的に楽しみを持って活動ができるよう支援している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナ禍のため家族や地域の方との外出はできていないが、職員は季節の花々や馴染みの場所までドライブを行っている。	外食やドライブに加え、過去には入居者との会話から、昔馴染みの汽車に乗る外出をした事もあります。現在は近所のお花見をしたり、様子を見ながら徐々に再開しています。また、天気の良い日は事業所周辺の散歩に行き、五感刺激を得られる機会を生活の中に取り入れた工夫が見受けられます。	



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	認知症の状態に応じて少額を手元を持っている人もいますが、金銭トラブルに繋がらないよう金銭管理を行い、必要時に本人の希望の物が購入出来るよう支援している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	希望に応じて対応している。携帯電話やタブレット端末の使用により家族と自由に連絡が出来るよう支援している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	季節感のある生け花や装飾をスタッフと一緒に作成し掲示する。ゆったりとくつろげる空間を工夫している。環境委員会を設置し、臭い、湿度、日差し、照明の調整、作業の音、会話のトーンなどを調べ、配慮している。	共有空間には季節感のある装飾と、入居者と職員が共に製作した作品が飾ってあり、日々の活動の様子が見受けられます。環境委員を中心に定期的に職員の言動や環境の点検をし、居心地の良い空間を提供できるように取り組んでいます。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	共用スペースのテレビやソファ、椅子の配置を工夫し、ゆったり過ごせる環境を工夫している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	馴染みのある品等を持参して頂き、安心して過ごせる空間、環境を工夫している。	机や椅子など馴染みの家具を持ち込み、本人の要望に合わせた配置を行っています。夫婦が同室で過ごせるように環境を工夫する等、入居者が居心地良く過ごせるようにしている様子が窺えます。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	利用者の状況に応じて、手すりを増設したり、居室やトイレの表示を分かりやすくして、自発的に行動ができるよう工夫している。		